

授業科目名	演劇ワークショップ実習D	担当教員	平田 知之 田上 豊
必修の区分	選択		
単位数	2 単位		
授業の方法	実習		
開講年次	2 年第 4 クォーター		
講義内容	短期間で集中して（冬季集中講義）、演劇ワークショップファシリテーター、教育演劇コーディネーターの仕事、ならびにそれらを巡る仕事に焦点をあてて、ワークショップの実践や準備、振り返り、コーディネートのプロセスを、実際に体験して省察し、将来実践家として活躍するための、基本的な考え方や、技術、基盤となる理論の獲得を目指すためのワークショップを実習する。 演劇ワークショップファシリテーターして必要な、インプロビゼーション（即興演劇）、デバイジング（集団創作）の理念・技能を修得するために、外部講師を招聘する予定。即興演劇の知見は、将来実演家として活躍するためにも役に立つであろう。		
到達目標	・演劇ワークショップのファシリテーターやコーディネーターの仕事の意義や、実務内容を理解できるようになる ・演劇ワークショップの現場に、リーダーまたは補助者として参画できるようになる ・コーディネーターとして、クライアントの願いに沿ったワークショップを企画し、芸術家と現場をつなぎ、当日運営やフィードバックができるようになる		
授業計画	6 日間の集中講義（1 日 7.5 時間）で実施する。 第 1 回 ・オリエンテーション ・演劇ワークショップのプロセス ・企画、打合せ、実施、検討会 ・導入、展開、振り返り ・ファシリテーター実習（1）導入とアイスブレイク 第 2 回 ・ファシリテーター実習（2）評価と振り返りのポイント ・ファシリテーター実習（3）困難を抱える参加者の支援 第 3 回 ・インプロビゼーション・デバイジング実習（1） 第 4 回 ・インプロビゼーション・デバイジング実習（2） 第 5 回 ・公共劇場、N P O 法人、中間支援団体の意義と役割 ・ワークショップと安全（実演家や参加者の心の安全、権利侵害） ・プログラム作成実習（1）クライアントの意向や趣旨の活かし方 第 6 回 ・演劇ワークショップを支援する、実演家団体の取組 ・プログラム作成実習（2）採用される企画書の書き方 ・ファシリテーターやコーディネーターとして成長するために		

事前・事後 学習	事前 ・実習で紹介する参考文献を次回までに読んでおくこと 事後 ・実習終了時に出す課題について小レポートを作成すること
テキスト	各回の授業において資料を配付する
参考文献	『SPT educational 1～6』（世田谷パブリックシアター学芸, 2007～2012, 世田谷文化財団） ※ https://setagaya-pt.jp/publications/other/ からダウンロード可能
成績評価 の基準	最終発表 30% 、実習への取り込み姿勢や日報（振り返りシート）の内容など実習態度 70%
履修上の注意 履修要件	特になし（備考欄参照）
実践的教育	
備考欄	理論科目「演劇教育入門」「演劇教育論」と合わせて理論と実践の往還ができるように系統的に科目を配置しているので、履修計画の参考にしてほしい。 また、履修希望者が 50 名を超える場合、希望理由調査や他科目履修状況をもとに選考することがある。